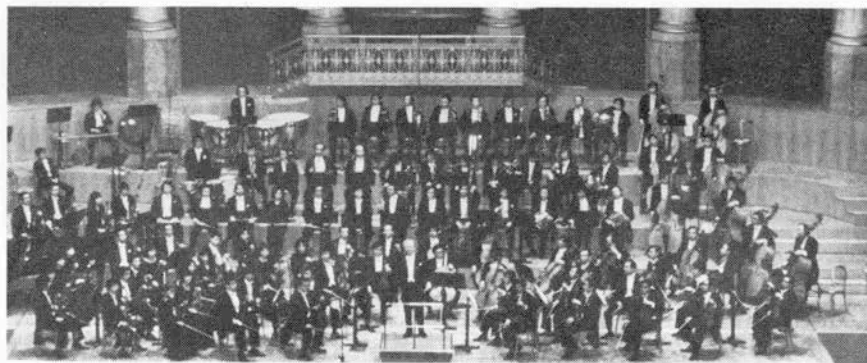


☆座談会☆

大フィル、世界を翔る

—ヨーロッパ演奏旅行を終えて—



ウィーン・コンツェルトハウスにて（10月13日）

〈出席者〉

朝比奈千足、田原 富子、持田 洋

このほど大阪フィルハーモニー交響楽団が約一カ月にわたる二十回のヨーロッパ演奏旅行から帰国した。ヨーロッパでの全行程七千五百キロ、指揮の朝比奈隆、山田和慶両氏以下事務の人まで総勢百十二名。

そこでこの演奏旅行でヨーロッパを回った三人の方々——クラリネットの独奏者として参加した朝比奈千足さん、同じくピアノ奏者として参加した田原富子さん、そして大フィルメンバーで首席フルート奏者の持田洋さんにお集りいただきお話を伺った。

★受けた「大阪ファンタジー」

朝比奈 大阪フィルがヨーロッパ演奏旅行に出掛けることになったのは、モントルー（スイス）の音楽祭に招待されたのがきっかけなんです。この機会にひとつヨーロッパを回ってみようということになったわけです。

伊丹からチャーター機でジュネーブまで直行し、帰りもハンブルクから伊丹まで直行、途中の移動は殆んどバスを使いました。二十回のコンサートは、スイスはベルン、チューリッヒ、バーゼル、ジュネーブ、その他にラ・ショー・ド・フォン、ここは小さな町ですが最初に演奏をやったところです。それからビール、ここはドイツ語

圏とフランス語圏のちょうど境でどんなことでも二カ国語で書いてあるんです。それとモントルーの音楽祭とそれに附属してサンモリスというモントルーから汽車で二十分ほどの山の中の小さな町の大学の小さなホールでやりました。オーストリアはウィーン、聖フローリアン、ここにはブルックナーがそこで働いていたので有名な教会があり、町というよりは村のような小さな町ですが、ここでのコンサートは素晴しかったですよ。教会に附属した大理石造りのホールでブルックナーを演奏したんですがとてもよく響くんです。あとはビラハとニューデンブルグ。イタリアはベネチアで一回だけ。ドイツはアウグスブルク、ランダム、ここもものすごく小さな町です。それとハイデルベルク、北の方でウィルヘルムスハーベン、これは北海に面した港町です。それからすぐにベルリンに住んでそこでコンサートをしてそのあとオランダへ回ってブローニンゲンへ行き、そのあとドイツのリューベックへ戻って、これで二十回のコンサートが終ったわけです。

田原 プログラムは三つあるんですね。

持田 シンフォニーではブルックナー、ベートーヴェンの第三、シベリウスの第二、チャイコフスキーの第六、モントルーの音楽祭でやったシューマンの第四、それと



朝比奈 千足さん

序曲、協奏曲ですね。

朝比奈 それらをまぜこぜにやっただけです。曲目としては非常にたくさんあるんですよ。全部で十六、七曲を組み合わせてやっただけです。

持田 その中では大栗裕の「大阪ファンタジー」が異色でしたね。

朝比奈 「大阪ファンタジー」は一番演奏回数が多かったですね。スイスではモントルー以外全部やったし、全部で十三回です。売れて売れて性がなかったですね。

持田 曲としては割とよく鳴るんです。

朝比奈 曲がエキゾチックで面白いし、楽器も邦楽器を使っていますし。

持田 現地の日本人の反応が傑作だったですよ。

朝比奈 プログラムを組むに際しては、まず、向こうのマネージャーからお前たちは何が出来るのかという曲目の照会があるんです。それで、ベルリンは自主公演だったんですが、それ以外は殆どうちのレパートリー表から向こうが選曲をしたんです。シベリウスはレパートリーには入ってなかったんですが、ぜひやってくれということをやったんです。

田原 大フィルとしては珍しいですね。

朝比奈 たとえばランダムではこんなところでこんなにやっていいのかというほどたくさんやっただけです。三曲もやったかな。大栗、ウェーバーのコンチェルト、ブルックナーです。こっちが心配するぐらい向こうがすごい希望を出したんです。

持田 町は小さいが耳がこえていて口がうるさいから馬鹿にしないでやれと事前にいわれていましたね。

朝比奈 向こうのマネージャーからうるさい町だから一生懸命にやれっていわれましたね。(笑) 実際、長時間あきもせずジーンと聴いてたのにはびっくりしました。

日本人の作品は「大阪ファンタジー」一曲で、アンコールに「会津磐梯山」を用意してはいたんですがこれは結局やらなかった。

★印象に残ったベネチアの町



田原 富子さん

田原 私は今回行ったところは殆んど初めてなんですが演奏会はしなかったけれどブレーメンがよかったですね。たまたまカーニバルをやってたんです。

朝比奈 ジブシーが移動遊園地をやっているんですよ。ジェットコースターや観覧車や射的があったり、綿菓子売ってたり。

田原 ブローリングゲンも印象に残っていますね。そうそう、ブレーメンで風車を見ました。(笑) 私は予定とし



持田 洋さん

ては暇だったので(笑)、こんなときだからと田舎の町へ行くとしても延々と時間を喰うわけですね。昼間はズツとバスに乗っていました。だから、変な習慣がついちちゃって、ものすごく食べて、乗りものに乗ったら必ず眠るの。(笑) バスに乗っている間は何もすることがないから眠るでしょう。演奏先ではそう大フィルばかり聴かなくても思うんですけど(笑) まあどんな調子か聴いてみようかしらんと聴くでしょう。だからあまり出歩けませんでした。他のオーケストラを聴きたいとは思いませんでしたけど、オペラはウィーン、ミュンヘン、ベルリン、ハンブルグで見ました。

朝比奈 旅行の関係で演奏はしなくてもそこで泊まる町もあるんですね。ミュンヘン、ブレーメン、ハンブルグ。

持田 ベネチアには初めて行きましたが、前にトマス・マンの映画「ベニスに死す」をドイツで見まして、そのときの印象が非常に強かったんです。初めて現場へ行っても色々な意味で感慨深いと思いました。ベネチアはいかにもヨーロッパですからね。ドイツなんかの大きな町ってのはあまり個性がないでしょう。みんな戦争にもあつてますしね。その点、ベネチアはいかにもヨーロッパへ来たって感じがしましたね。観光地ってのはいやらしいという気持ちもあるけれどやっぱりいいですね。時間とお金があればもったいいと思ったでしょうけどね(笑) きれいというより全然別世界だという感じがですね。たまに行くにはいいですよ。

朝比奈 何となく取り残された感じがするし、しかし、こういうものが存在しているという意味ではベネチアはいいですね。

持田 もっとも町の印象はシーズンが違つたらずい分と違いますね。

田原 お天気によつても左右されますね。ベネチアでも天気が悪くつて、朝早く起きて出たときにはちゃんと地面を歩けたんですが、戻つて来ようとしたら本の三十分位の間にもう冠水で歩けないんです。土地の人が橋桁み

たいなものを持って来てそれを渡して帰って来ました。

★ヨーロッパの聴衆は反応がすばやい

朝比奈 演奏に対する反応はどの町もあんまり変らなかつたようですね。

田原 私が一番よく客席で聴いていたけれど変らなかつたようですね。

持田 ただね、千足さんのように親子で演奏をやることについて、ヨーロッパの場合、聴衆の質もあるんでしようけど、好意的っていうか、楽しんでるんですね。親子協演つても割と積極的に、ああ、楽しそうだなあ、彼らもきつとハッピーだなんて感じで非常に良しとしているところがあるが日本とは違うようですね。ヨーロッパではそもそも演奏形態は家庭だとか狭いコミュニティという仲間集いから生まれて来たんですね。だから、親子協演ということにひどくアットホームで楽しいという感じを持つんですね。親子で協演出来てうらやましいなという感じがありますね。そういう意味の共感があつたようですね。

朝比奈 小さな町へ行けば行くほどそういう感じがありましたね。ドイツの小さな町へ行くと新聞の批評なんかを読んでも親子協演というものを家庭的な感じの意味でとらえているのが多いですね。彼の父は非常にうまくやってよかったとか、父と一緒にほめてあつたり（笑）、そういうほめ方ですね。聴衆は概して温つたかつたですね。

田原 客席に座っていますでしよう。そうしたらすぐに反応が分るんです。

朝比奈 やっている最中に反応があるんです。私も客席で聴いたことがあるんですけど、やっている最中にきれいなフレーズが出て来ると、それがお客さんの氣に入つた場合、たとえば、老夫婦が二人で聴いていましてね、やっている最中に顔を見合せてニコッと笑つたり、も

のすごく楽しんでるなという感じがあるんです。

田原 演奏の拙いときはその反対の場合もあるわけですね。

朝比奈 反応が豊かというかダイレクトなんですね。

持田 自分も何かいわなければ氣が済まないんですよ。いうというか、自分なりの考えがないと黙って聴いていただけでは駄目なわけですね。

朝比奈 働きかけがあるわけ。それが日本との大きな違いですね。

★隣の町のこと分らない

朝比奈 小さな町だと日本のオーケストラは元より、オーケストラ自体が珍しいところもありましたね。だからもの珍らしさというより飢えた感じで聴いている人もありました。大きな町では日本の他のオーケストラも行っているからそれと比べられたらうし、耳もこえてますね。その町が優秀なオーケストラを持っていますしね。

持田 ベルリンとかウィーンとか日本人がそこに住んでいて音楽の勉強をしている町の人たちは、彼ら日本人の優秀さをよく知っているから日本から来たオーケストラも当然優秀だろうという期待があるわけなんです。反対に小さい町だと日本人が本当にクラシックをやるのだからかという段階の人も多いですね。だから、ヨーロッパでは知っている人はものすごく知っているし、知らない人は本当に知らないという格差が大きいですね。大ファイルということじゃなくして、日本というものに対する認識が町によって全然違いますからね。

朝比奈 情報量が日本と全然違いますからね。向こうはその町を一步出るとその町の情報が全然ないですからね隣の町の情報なんて殆んどない。新聞もその町の新聞でしよう。我々の演奏がその町の新聞に報道されるのは次の日か次の次の日でしょう。ところが我々は移動して他の町へ行っている。そうすると前に演奏した町の情報なんかその町では全然聞けないわけですよ。非常に小

さな新聞に大フィルが演奏をしたと載るんですが、隣の町にはそのことが分らないですね。

持田 よく向こうの新聞に載った批評を日本に持って来て紹介するんですが、それが何新聞に載ったかで全然意味が違うわけですよ。全国紙とかそういう新聞に載ればそこの批評家は大きな力を持っていますから信頼に足る批評をやっているわけです。批評というものだけでも新聞によって違うわけですよ。だから、日本へは絶賛を博したと伝わってもどこの新聞に載ったかってことが問題なんです。

朝比奈 面白半分を書くことの多い新聞もあるんです。ドイツなんかでも東京で演奏をして関西で演奏をするよりももっと聴衆の落差が大きいですね。演奏会場も日本と全然違いますね。

田原 お風呂場みたいな会場もありましたね。(笑)

朝比奈 風呂場みたいに残響の大きいところがチューリッヒでありましたね。

持田 ところが、ヨーロッパのホールには計算があるのかなのか、人がいっぱい入ると丁度よくなるんです。

朝比奈 たとえばハイデルベルクでも感心したのは、とにかくワーンとしたホールで、こりゃ、またちよつと響きすぎるかなと思っていたら、お客さんが入ると丁度いいんですよ。日本の場合だとお客さんが入ったらいって残響がなくなつて悪くなるんです。また、向こうは、入れものが小さいから音が散らないのがいいですね。

田原 ホールは背が高くて横巾が狭いですからね。

朝比奈 日本の場合は神戸文化ホールでも大阪のフェスティバルホールでも大き過ぎるんですね。だから音が散つてまとまりがなくなつてしまう。

持田 ホールが広いと神経も集中しにくくなりますね。

朝比奈 日本の場合は多目的ホールですからね。向こうはクラシックの音楽会しかないわけですよ。

★大成功だった演奏旅行

田原 今回の演奏旅行で一番感じたことは向こうではお客さんがゆっくりと腰を落ち着けて聴こうかなと思ってるし、こっちもゆっくり腰を落ち着けて演ろうかな(笑)というところがあるんですね。やつついで間に合えばいいやということじゃなくって。(笑)それと意外に身体はものものと(笑)再認識しました。自信がつけましたね。

持田 僕は三年半前にハンブルクから日本へ帰って来たんです。今度再び行って僕自身の変化というか、三年半の個人的な時間の流れを感じたというか、オレも変わったなという実感を持ちました。ちよつとキザだな(笑)

朝比奈 一カ月の間に十一回も本番をするなんて後にも先にもないだろうけど(笑)初めはものすごく心配だったんです。しかし、いざ始めてみると無我夢中になって終つてみれば何でもなかったなあとという感じがしてそういう意味で自信がついたというか、やれば出来るんだなあとという自信が肉体的にも精神的にも出来ました。

それと旅行に関しても演奏に関しても全体がうまく行ったことがものすごく嬉しかったですね。出発するまでは経済的にも色々問題があったし、何でこんな時期に行くのかとか、大フィルの現在の実力で果してうまく行くのかどうかという問題もあったんです。もちろん、経済的援助も色々あったのですが、結果としてうまく行けたし、現地のマネージャーもこんなにうまく行ったのは珍しいといってくれました。

それと一カ月間、団体行動なのでみんな一緒にいるんですが、そうすると普段のつき合いですは仲々分らない裸の人間がよく分るんですね。何だ、あんな奴だったのか(笑)とか、意外な面が出て来るんですね。それが今後の運営にとってプラスになるのかマイナスになるのかは分りませんが、いづれにせよ今回の初の演奏旅行の成功によって大フィルも一層飛躍すると思います。

(神戸竹葉亭にて)



Air Mail from World

● 世界からの便り

パリから神戸へ

アトリエ

松谷武判

〈洋画家〉

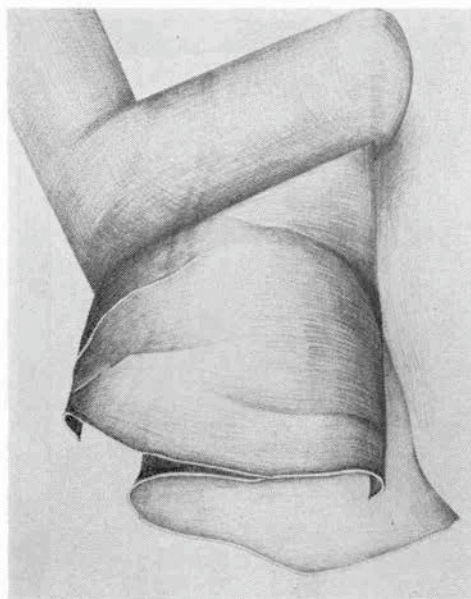
今年のパリは異常な暑さでしたので、灰色の冬を忘れてしまいましたがこうして又やって来ると嫌なものです。重油のストーブをどんどん焚いてアトリエを暖くしている毎日です。そして、この夏はパカンスを返上して版画のアトリエの引越しに時間を取られてしまいました。パリ市が建てているアトリエもあります、矢張り日本同様当地も住宅難で、新たにアトリエを借りたり、買ったりすると大変高くてきかしくって、我々には何んといっても広い場所が必要で狭い所だと作品も小さくなりがちです。幸い絵の方は、バステイユに元家具屋の職人が使用していたアトリエを借り受け仕事を続けておりますが、版画のアトリエだけが反対側のモンパルナツスにあつて毎日車か地下鉄で四〇分程掛つて通つております。ちょうどこの春、矢張りこのバステイユに再び家具屋の職人用アトリエが見つかり大きさも50㎡あり借り受ける事に成功しました。パリに来まして十年、あちこち引越しましたがどうやらこの辺りに落ち着きそうです。そんなわけで、この界限には沢山の家具屋とそれを作る職人さんのアトリエが到る所にあり、ル・デュ・フォール・サンアントアン（通り）の家具屋街を中心に小さなパッサージュ（路地）には今も老職人がこつ々々とリイ調の重々しい家具を作っております。彼等はフランス人以外にイタリヤ人やギリシヤ人であつたりして、三〇〜四〇年間も同じ仕事を続けてきた。六〇〜七〇才代

のアーティスト・アルチザン、いわゆる技術職人です。

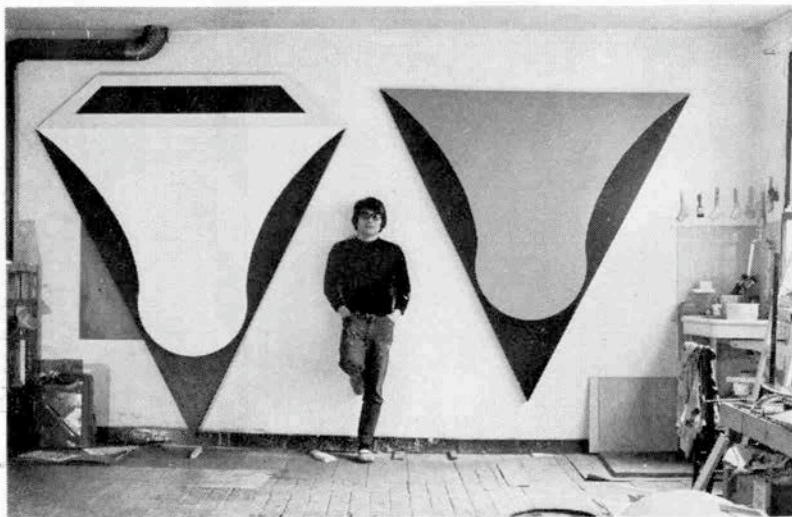
古いシステムで作る手製の家具の若い後継者がなかなかいなくて退職して行く職人が最近多く出始めここにも時代の移り変りを見ることが出来ます。彼等のアトリエは木屑と家具用のニス、大きな暖炉、分厚い木工用机と裸電球といった具合で、朝、陽が登ると仕事を始め、暗くなるとやめるといったごく自然な仕事の方法を繰り返しています。昼食後や午後の休息には近くのカフェにやってきました。同輩の職人同志で手垢で黒ずんだチェスの駒に夢中になっています。何か一時代前の感じがまだ生きていると云つた処ですが、そんな中に最近の若い作家が思い思いに場所をみつけ移り始め、私の近くにはリトグラフの工房、二、三のエッチングのアトリエを始め友人だけでも随分移住して立派なアトリエに改造しています。何分、家具屋さんのアトリエであつた所ですから電気がきているぐらいで、水道、ガスを引いたり、その上、アトリエの壁や天井は何十年も塗り替えたことがなく、ニスと煤で真黒、それを剥し真白にペンキを塗り上げるのです。元々広い所ですから出来上ると見違える程綺麗になり大作には最適です。今にバステイユも第二のモンマルトルやモンパルナツスになるのではないかと話しております。

ところで私の作品についてメモした事を一寸書いてみますと、人は自分の好む形があるもので、それは作画を

長く続けることによって必然的に出てくる。もちろんそれはその人のものであるが、時にはそれが邪魔になることもあるが、しかし、それ(形)がなければ作画は出来ない。頭であれこれ構成を試みる、いざ筆を取って描いてみると又違った空間が生れることもあるが、最初に描き始めた時のイメージを保ちたく意識的にイメージに近づけようと試みる。結果的に幾枚もの作品が出来上がる。時々随分以前の作品を取り出して眺めてみることもある。特に二〇才代の作品はがむしやりに作って来たので、ゆっくり眺めてみると気づいていなかった面を発見する。何か出来そうに思い再びその勢いで筆を取ってみた事があるが、記憶には新鮮で確に何か生れそうに思えたが矢張り駄目であった。すでに時間の流れが私を同一時点に置いていないのである。最近、イメージをより明確にむしろ理論より生れる程に近づけて仕事を試みている。例えばゴムマリのような軟球体がある硬い物におそわれ、圧迫され、壊しにかけられながらもヌメヌメとした形を弾き出す。押えつけてくる物は、丸太棒の如く硬く、時には、突如おそい、ぶっかって来て、中にのめり込み、

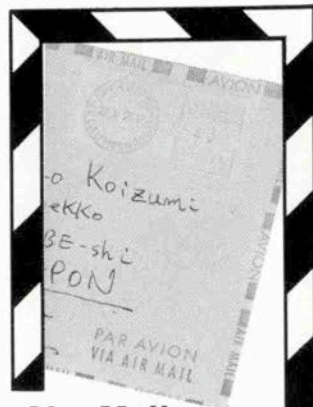


それでも軟球体は余裕を持ってその力を吸収し、自身の呼吸を悠々と続ける。硬い物と軟らかい物とが相対してセリ合う時、どうしても軟らかい方に力加わり簡単に破壊しそうに思えるが、逆に粘り強く弾力性に富み、一つの均衡が出来る。この不安定ながら軟らかいものが持ち得る性質(状態)が興味のある点で、作画のイメージとして最近連作しています。



▲ デッサン「相対する力」(1974年)

▶ バスティーユのアトリエで(1974年)



Air Mail from World

● 世界からの便り

パリから神戸へ

世界はひとつ

岩島雅彦

〈洋画家〉

「世界は一つ」という言葉は良い言葉であると思うのですが、人が何もかも全て平等ということはあり得ませんし、だから、もしかしたら世界は一つでは無い方が本当は幸わせなのではないかなどとも思います。

ブラック・イズ・ビューティフルという言葉などを教えられるあまり元気が出ません。ヨーロッパの害毒が可成り体内にまわってきていると反省すべきですが、

「地球の上には色の白い人間、黒い人間、黄色い人間がそれぞれ居て、日本人は黄色い種だといわれるが、あなたは黄色ではないじゃないか、我々と同じだ」これは最近あるスペイン人の知人が私に云ったことばです。

「日本人は気だけがやさしくて、とても好きだ。ヨーロッパ人はどちらかというときつい感じであまり好きではない」これはあるポルトガルの若い女性が私の知人である日本人に云ったことです。

これらの言葉は我々日本人に対してのお世辞であり、少くとも好意を示す表現として使われているのですが、私は考えこまざるを得ない気持です。ヨーロッパに来て四年半になりますが、ことごとくに反ばつし合うフランス人とイギリス人や、殆んど熱狂的と云える程の憎悪をこめてイタリイ人をのしるスペイン人などの例をみているうちに、では一体我々日本人はここヨーロッパでどの程度人として扱われているのだろうか、あるいは、どのような意味合いで人として扱われているのだろうか、

というはなはだ情無い疑問をしばしば持つようになりました。「お前は黄色くない、我々と一緒だ」という言葉は、明らかに彼等がスペイン人としてか、ヨーロッパ人としてか、又は白人としてか、とにかく日本人との差を意識している証拠でしょうし、更にいえば人としても日本人とは差を持ったものであるということを意識していることを感じさせます。

我々は、自分と他者とが人として対等であると信じられる時に必死になって愛したり憎んだりという現象を持つわけで、人として同等ではない間柄（そんな関係はあり得る筈はないのですが）では、この「必死になる」という真剣な状態は起り得るうちにありません。たとえ私が日本人としてはたいして色の黒い方ではないとしても、それはどのような徳とも関係がある筈はありません、そのような個人的特徴をとり上げて成された真剣さを欠くお世辞の中に、これを云った知人の思い上りを感じそうという思い上りがまるで罪の無い習慣のようにしばしばいきどおりを感じるのは、私がいかにもひがみっぽいからなのでしょう。

「日本人のやさしい気だてが好きだ」というポルトガル女性の言葉は、先のスペイン人の場合と違ってもう少し素直にその好意の表現を受け入れることも出来ます。しかし、事をこのように考え直してみても出来そう



前・スタードラー・ギャラリー通りのセーヌ



人々うらぬ陰の木のパリ

もしない遠い国日本に大変良い点数を与えることになる。と、まあこう書きますと、あまりにも図式的な物の見方ばかりしているようで私にもやになりますし、事実彼女の云うことは殆んど当たっているのも、もっとすんなりと聞いておけば良いのかもしれないのですが、私がしつこくひつかかるのはやはり次の様な点です。

「ヨーロッパ人というのは……」という時の彼女は、自分もヨーロッパ人として、つまり人として差を持たない人間同志の一人として仲間の悪口をいうという真剣さを持っているのに対し、日本人のことをいう場合にはもつとリラックスしているのではないかということ。彼女に限らずヨーロッパ人達が真の日本や日本人を知らないといつてとがめることは意味の無いことです。が、彼女の言葉をこう書き換えてみてはどうでしょうか。「日本人は白人でもないのに、ヨーロッパ人に無いやさしさという美点を持っている」と。

私は少しヨーロッパをなまめに見過ぎていたかもしれませんが、何年かをヨーロッパで暮らしてみ、先に述べたような実感が常につきまとってきたことだけは否定出来ない気持です。白人社会の優越などということ大声で主張するような人は無論何処にもみられません。しかし、彼等の中には、「白人というのが人なのだ、有色人種達も人であるのならこれでもかまわない。が、ともかく我々はたしかに人なのだ」といった得体のしれないどう相手にしようもないものが動かしがたくあるように思えます。事の良し悪しを超えて動かしがたくみえるこの事が一体何に原因しているのか分りませんが、街のウィンドーのガラスに偏平な顔と貧弱な体格の私自身が実に思いがけなくあらわれてきたりした時などは、思わず「やっぱロイツがその理由だろうか」などとすんでのことに思いこみそうになりそんな気持をふり払おうとすればするガラスの中の私は念を押すようにそのつべりした顔と、周囲に群っている彫刻的な顔との違いをおしつけて来るのです。

です。スペインもそうですが、ポルトガルは何といつてもそのモダニティーにおいて、又地理的条件において、ヨーロッパでは田舎者視されているようです。国としての貧しさ、人々の政治意識の低さ、無気力ともつながる人の良さ、その他我々には分らない色々な要因が重って何となく、このビレネーのかたにある二つの国を軽んじるムードが、たしかにここフランスにはみられます。こうしたムードへの反感が「……ヨーロッパ人は一体にきつい感じで……」という、一見自己批判めいた発言になり、「その点日本人はやさしくて……」と、良く知り

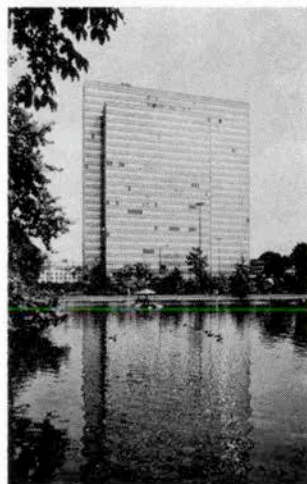
Air Mail from World

● 世界からの便り

〈造形作家〉

起承転結 植松奎二

デュッセルドルフから神戸へ



DÜSSELDORF
Thyssen-Haus

お元気ですか

＜ああ＞ああああああ
 113-1 Daishin Bldg 7F
 Higashi-cho Ikuta-ku
 Kobe City Japan
 Mit Luftpost
 Par Avion
 Japan



Air Mail from World

●世界からの便り

フランクフルトから神戸へ

ドイツの街

大井耕三

〈ユーハイム ドイツ研修員〉

で、いつまでも眺めている毎日である。

日本全国津々浦々、洋菓子店のない町はないほどになり、大変結構なことだ。しかし、日本にはドイツでみるほど新鮮な菓子は非常に少ないようである。ドイツでは材料も自然的な物が多く、健康的であると同時に美味しいうである。ところが日本と比べて衛生面には少しルーズなのが残念である。氣候の違いがあるかもしれないが、日本のように保健所の厳しい目がないことが影響しているのではないかと思われる。またドイツ人がこんなによく菓子を食べるとは知らなかったため、最初は驚いた。特にお年寄りは、いろいろと語りながら何時間、なかにはウエイトレスと友達になるほど通う人も。こちらの飲食店のほとんどはウエイトレスの受持ち範囲が決まっているようで、そのためかどの店に入っても気持ちよく接待してくれる。

ドイツという国は、大変に緑の多い国で、高い山は少なく、ほとんどが丘。そして都市も、西ベルリン、ハンブルグ、ミュンヘンを除けば小さな都市ばかり。そして日本のようにゴミゴミとして混雑しているところは見当らない。道路が発達しているせいか、日本のように何でもが都市に集中してしまうことも少ない。スタイルにしても、日本では派手な格好をしようとかくうるさくいわれることも、こちらの女性はどこへ行っても、どんなスタイルをしても似合うようで（神戸の女性のように）、男性を楽しませてくれる。特に我々は物珍しさも手伝っ

去年のクリスマスはドイツで迎えた。その時も日本のクリスマスのイメージでいたものだから、すこし面喰った。市内の雰囲気も、日本のような商売戦線まっ只中という感じも全くなく、静かにクリスマスを迎えている。そしてクリスマスの四週間前から四本のローソクを用意（日本のお正月の飾り物に似ている）し、一週ごとに一本ずつ灯し、最後の夜に四本全部灯される。そして家族揃って迎える。これが普通のクリスマスのようである。

日本のクリスマスのように、パー等は高くなり、商店街にはクリスマスセールと騒々しいジングルベル。全く対象的である。ドイツではテレビにもジングルベルは聞かれない。流れてくるのは、聖夜をはじめ数多くの讃美歌である。私はそんなドイツ的なクリスマスを好む。そのクリスマスが過ぎ、お正月を迎えた。しかし、こちらは非常にもの足りない新年を祝った。

いまだに日本での癖が抜けず、テレビの前に座り、言葉もよく解らないのに一人前に笑っている。ドイツでは夕方の四時半頃にならないと映らない。そして夜は11時頃まで。日本では朝の六時から深夜まで。それほど重要な放送とも思えないが、楽しい番組が多く、チャンネル争いでケンカになる家庭が多い日本には改めて感心してしまう。ドイツの放送局は二局。内容は、ドキュメンタリー的なもの、スポーツニュース、オペラなどが多く、



同じく提携相手のパルテス氏の工場での実習風景



ユーハイムがドイツで提携しているリンパッハ氏夫妻とその子供たち

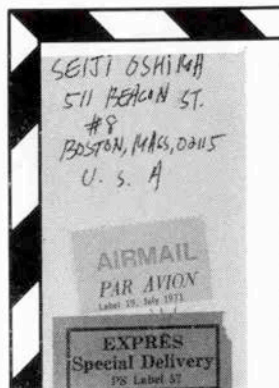


休日をつろぐ大井さん

日本にある映画劇場や歌番組は数えるほどしかない。日曜日には昼前から放送しているが、民謡や交響楽。コマースヤルも少なく、映画やドラマなどの途中にはコマースヤルは全く入らないので非常に見易く、有難い。しかし私はドラマが好きでよく見ているが、そしてテレビなしではいられないのだが、最近のテレビ番組はドイツでも質の低下が目立ち、近頃はもっぱらラジオに魅力を感じている。

新鮮なものを作る仕事のため朝が早く、日本での生活が恋しい。神戸には六甲という自然いっぱい山、その前には海、夜ともなれば一万ドルの夜景。ドイツではこの夜景はどこへいっても見られない。神戸の景色は世界的に誇れるようである。いつまでもその美しさを保ってもらいたいものである。

ドイツでは多くの好意を受けた。仕事の上で協力していただいた人たち、街で道を親切に教えて下さった人、電車の席で隣りに居合わせいろいろな話をしてくれた人、ドイツのうまいビールをこちそうしてくれた人。みんなとても親切で不自由なく無事神戸に帰れるようです。



Air Mail from World

●世界からの便り

ボストンから神戸へ

只今奮闘中！

大島正嗣

（ジャズ演奏家）

日出ずるところの日本を離れて早いものでもう二十五カ月がすぎました。おそろしいほど長くて、そのクセおどろくほど短かい間に時が過ぎていったような気がします。ボストンにあるバークレイ音楽院の門をたたいて、

ぐぐり尊敬しているゲリー・パートン氏からモダンバイブラフォンテクニクの指導を受けながら、ジャズ音楽を勉強して、早や三年目になってしまいました。二年もあれば莫迦でも話せるという英語も調子が良く、学校の様子もよくわかってきたし、生活も慣れたし、適当にガールフレンドもできたし、金髪の青い目のかわい子とも会った。授業も興味のあるクラスが多くなり、あと二年をいかにして有意義に使っていこうかと考えているのです。

朝から夕方まで授業を受け、それから夜遅くまで他のブレイヤーとジャムセッションをやり、やっと学校から帰り、疲れはててベッドにころがりこむという生活が続いています。ジャムセッションのない時は、レコードを聞きながらの大奮闘をやったりしているのだが、男やめめにうじがわく、とまで言われるのはおもしろくないから、色々とその対策を研究しながら実行に移しているのです。掃除、せんたくもどっちかって言うと、やはり大奮闘のうちに入っているのです。というわけで忙しい、忙しいと自分が一六ミリのフィルムのような感じで動いているような気がします。一六ミリなんて聞くとチャッ

プリンの映画を思い出しますね。それを少し早くまわしたのを見ているようです。そんな生活のなかで週末を利用してナイアガラ大瀑布を見に行った時の珍道中のお話しをしましょうか。

メキシコ人、スペイン人、イタリア人、アメリカ人と国籍ごちゃまぜの友達で一台のレンタカーを貸りて、せいまいせまいと文句も言わないで七人でボストンからカナダまでドライブしていったのですが、ボストンから五時間ほど行った郊外で、メキシコ人がカナダ入国の通関で見せるべきのパスポートを忘れたと言いだし、それを取りに帰り、また再出発をしたりで、結局十時間ほど遅れてしまい、予定が大幅に狂った。いくらメキシコ人だからと言ってものんびりしすぎではないかと一同、目の玉が膨張してしまった。途中事故もなく無事にナイアガラに着き、あせってアメリカ側からのナイアガラフォールを見に行き、「畜生でかいな」なんて言っているうちにこんどはスペイン人が我々の車のキーをなくしたと言いだした。景色なんて見るひまもなく、ただ一つのキーを探しもとめて、いま歩いてきた道のりをまたもどきなおしているうちに、日がくれてきて、寒くなってきて、お腹もすいてくるし、一同みじめになる。あのスペイン人、情熱的に他の女性を探しているうちに車のキーなんて忘れるのじゃないかなんて白い目で見て、ふと目を下に向けたら我々の車の下にキーが落ちてあり、いままで



パークレー音楽院の仲間たち<左前筆者>

その小さなキーをもとめて歩きまわった距離を思いだすと疲れがわつとでてきそうだった。早い話しが、一度最初から最後まで見たフィルムを、こんどは逆回転にして最後から最初まで見ているような、なんとも、しまらない話です。皆、お腹がもうれつにすいているので、車で近くのレストランを求めてはしりまわり、知らない所だから、一度通った道にまたもどたりして、そろそろ目がちばしってきたころやつと見つけ、とびこんでいってローストビーフサンドイッチをむしゃぶりつき、精神安定。遅くなってきたのでモーターに行き、二人部屋のところを部屋代を浮かすべく、モーターのおやじと値段の交渉して、その部屋を七人で占領し、全員シャワーをあびて身ぎれいにして夜の作戦準備完了。その足でデイスコティックに乗りこみ、例のバスポート事件のメキシコ人が「近くに住んでいるというガールフレンドに会いに行くから、車を使いたい。なに、すぐもどってくるから」なんて言うから別れて、我々はその安っぽいデイスコティッ

クの入口で「こいつは金を払った」という旨のハンコを手のひらに押ししてもらい、おのおのそれぞれのダンスの相手を見つけるべしがんばってはみたものの、どうどう調子は良いかと仲間うちで聞きあうばかりでもうひとつ進歩も発展もなく、疲れてしまう。さあそろそろ帰って寝よう、明日はカナダからナイアガラフォールを見ようなんてがやがや言いながら外にでると、まだ車が帰ってきていないのです。きょうれつなロック音楽やファン気なのなかで、快よく興奮していたのも寒さと共に静まり、寒さのため全員ふるえているころ、例のメキシコがキゲンの良い顔をしてもどってきた。お互いにもうあのメキシコには車を使わせないことに決めモーターに帰った。いびきのとびかうなかで眠りにつき、明朝カナダに出発。何の問題もなく通関をし、やはりカナダ側からの展望の方が壮大だななんて思いながら見てまわり、俺のおじいさんはあの岩のあたりで写真撮ったのかななんて子供の時に見た昔しの古い写真を思いだし、感慨無量でいるうちに日がくれてきた。帰る途中に、ナイアガラフォールの上流でボートに乗っていた人達がオイルを流されてしまい、なすすべもないまま下流まで流されてきて、このままではあの大瀑布の中に落ちこんでしまうというわけで近くに待機していた。観光客用のヘリコプターが救援に飛びたった。ボートの上までいって助けている途中、ボートの人達が我がちにヘリのふちをつかんだので、今度はそのヘリコプターがバランスをくずしてしまい墜落してしまったという事故にであいました。あとで聞いた話しでは、全員無事に救助されたそうだけれどもそのボートは滝の中に落っこちてしまったというのです。そういつている間も車は走りつづけ、カナダ出国の際のきびしい検査も通りぬけ、あとは真つ暗な道をただひたすら走りつづけてボストンに着く。

ブルーデンシャルタリーを見てやつと家に着いた感じがした、そんな思い出があります。



Air Mail from World

●世界からの便り

バンコックから神戸へ

象と美女

山内孝彦

(泰大丸有限公司)

もう3年半前になるが、バンコクに勤務する事になった私のタイ国についての知識は、全く無いに等しい程、乏しいものであった。この国が東南アジアの一角に位置すること、バンコクがその首都であり、我社のブランチがそこにあるということ以外には——ただ、この乏しい知識とは別に、私にはこの国に関する二つの強い印象があった。この印象が強いと云うのも、二つの事柄があまりにも結び付きにくい異質のものであったからかも知れない。

その一つは、万博にやって来た象のことである。一九七〇年、万博の年、神戸の港に象の一団がやって来た。これは、万博に参加したタイがイベントとして連れて来たものだが、このうちの一頭が身ごもっていて、万博会場の小屋で可愛い子象を生むというエピソードがあった。この子象、お祭り広場にちなんだヒロバちゃんと名付けられ万博の人気者になった。

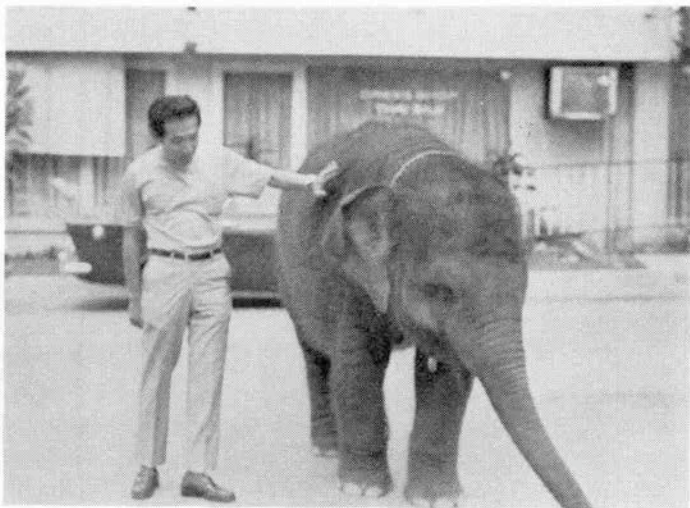
万博での行事もすんだ夏の終り、有名になった象の一行は、可愛い子象をメンバーに加え、千里から神戸の道を二日がかりの大行列で帰って行ったが、この大行列を、娘にせがまれて見たのが、私がタイを身近に見た最初である。子象を囲んでゆっくり、ゆっくりと歩く巨象達、その背に乗って真黒に日焦げた顔から白い歯を見せて手を振る原住民？（その時、私には少くともそう見えた）の姿は、一九七〇年、高度成長の頂点にあった、

あわただしい日本とはおおよそかけはなれたスケールの大きい、土くさい未開の臭いのするものであった。

もう一つは、ミス・タイとの出会いである。これ又、

万博で催されたミスインターナショナル世界大会で入賞した美女達が神戸の我社へサイン会にやって来た時、世話をしたことがある。アメリカ、フィンランドなど西洋の美女に混って、ひと際目立つ神秘的な東洋の美女——それがミス・タイであった。ぶっきらぼうにつつ立って握手を求める西洋式挨拶に比べ、少し膝を折って合掌する美しい挨拶は、男として極めて単純な感激を覚えたものである。象とその背に乗った男達と東洋の美女、この二つの印象は、私にこの国を色々と想像させてはくれたが決して理解はさせてくれなかった。

それから一年あまり、二つの印象をもって夕暮れのバンコクに着いた私は、そこで小さな失望と安堵を覚えた。それはむしろ雑然としてややゴミゴミした街、そこにはビルもあり、車も走り、雑踏があり、庶民の生活があるあまりにもありふれた街であったからであらう。それから間もなく、飯の住いとしたホテルで、私は、このマスコットとして泊り客に愛嬌をふりまく子象のヒロバちゃんに再会した。そして、このホテルのベルボーイの一人が、あの時、象の背に乗っていた原住民？であったこともわかった。さらに数カ月して、広告写真の撮影の仕事から、あの時の美女、ミス・タイにも再会することが



小象のピロバちゃんと山内さん

出来た。彼女は現在当地一流のモデルとして活躍している。こうして、この街で再会した象や原住民？や、美女は、日本で出会った時とは全く別のものであるようにさえ思えたがそれは、まぎれもなく同じ象であり同じ人であった。それは、彼等の姿が、この街、この国では、あまりにも自然であり、ごくあたり前の光景であり、何の疑問も抱かせないタイの姿であったからであらう。

この地に住んで三年半、今なお裸足で街を歩く人、交差点に止る車に群がってジャスミンの花輪を売る裸足の子供達、その中をぬって歩くきらびやかな美女、豪華なホテルで夜ごと開かれるパーティー、世界一流のデザイナーの手になるファッションショー。ベント、ジャガー、BMWなど世界の名車が音もなく走り去る。川辺の堀立

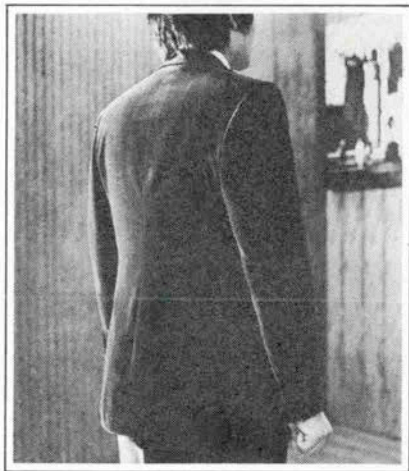
小屋で、用便から水浴、食事の用意まで、茶色に濁った川でまかなう人達、全身傷だらけのボディーにこぼれ落ちる軽三輪タクシー（日本製のミゼット）や、もう日本で見られないピロバのダルマ型ブルバードのタクシーは、市民の高級な足である。この国、この街には、こうした両極端が混在しているそれはむしろ調和が取れたものであるかのようにさえ見える。裸足の子ときらびやかな美女に象徴される貧と富、質素ときらびやかさ。そのどちらがこの国の虚像であり実像であるのか、私にはわからないが、これがこの国の現実の姿である。

ここ数年、この国にも色々な変化が見られる。かつての軍党政権が学生を中心とする民衆の手で倒され、新しい政府が総選挙によって生れた。そして、極めて幼いものであるけれど、民衆の間に民主主義が育ちはじめているチェンマイの玉本さんや反日運動などもあって、この国もけっこう日本のニュース登場する様になった。ひと度、こんなニュースが伝わると、日本では、経済進出のあり方から、援助のあり方、旅行者のマナー、在留邦人の生活態度まで『この国のためにこうあるべきだ』と極めて格調高いお説教と総反省がなされる。この国にも、他国の協力が必要であらう。しかし、この国の虚像を取り払う事が出来るのは、この国の人達でしかない。それにはたえ永い時間がかかろうとも――。私が初めて日本で出名った象や美女は、この国を理解するには、あまりにも困難し異質な印象であったければそれが又、この素顔であらう。

美しくきらびやかなお客様に混って、今日もエスカレーターで遊ぶ裸足の子供達を叱りながら、この国、この街にも、いつの日か、きつと虚像の取り払われる時がやって来るにちがいないと信じている。

余談になるが、ホテルのマスコットとして大きくなり過ぎた日本育れのピロバちゃん、今は東京郊外のあるゴルフ場にいるということである。

風格・歴史・誇り



「個性」と「一流」を
縫いあげる

金 柴田音吉洋服店

神戸・元町4丁目南 TEL 341-0693
大阪・高麗橋2丁目 TEL 231-2106

おんがら屋



きものと細貨
おんがら屋

神戸

西店/三宮センター街・電話 331-8836(代)
東店/三宮センター街・電話 331-0629
三宮店/さんちかタウン・電話 332-1700


東京

銀座コア店/4階着物コア・電話573-5298(代)
渋谷東急店/5階和装名家街・電話477-3409(直)
日本橋東急店/4階和装名家街・電話211-0511(代)
(内線294)
池袋バルコ店/4階着物小路・電話987-0561(直)

MAKE UP WITH ROYAL

'75~'76秋冬版
欧風で気品あふれる
NOWなファッション粋を
多数取り揃えました



 神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表

三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874~5

元町店は毎水曜日が休みです

三宮店は第2、第3水曜日が休みです

三宮店(さんちかタウン)は装いを新たに
して、ご来店をお待ちしております。

ユーハイムからお子様達へ
御家族へのファミリーギフト
大人への心のこもった贈り物
2人だけへの贈り物

●ビスケット

¥700・¥1,000・¥1,200・¥1,500・¥2,000・¥2,500・¥3,000



ユーハイムのお菓子は、純正材料をたっぷり使い、それぞれの持ち味を生かして作られています。お子さまはもちろん、味にうるさいV.V.A.にも、そのおいしさがよろこばれています。



本 店	神戸市生田区下山手通2-31	TEL (078)331-1694
三 宮 店	神戸市生田区三宮町3-15	TEL (078)331-2101
さんちか店	神戸市生田区三宮町1-1	TEL (078)391-3539